

明 珍 家

THE MYOCHEN FAMILY

52代続く

鐵の一族

玉鋼火箸

明珍家

玉鋼火箸

自在擺動

明

珍火箸風鈴、火箸が触れ合う時に響きわたる澄んだ音色。余韻のある神秘的な音は、鍛錬された鐵でなければ作り出せない音だ。鐵の火入れ、鍛造技術は一族に伝わる秘伝の技である。

明珍家は平安時代(781-1184)より続く甲冑師の家系であり、12世紀半ばに近衛天皇よりその技を賞賛され「明珍」の姓を賜った。

時代は大急な変化の時期を迎えた。

明治時代となり武士の時代が終わると甲冑の需要はなくなり、千利休のために火箸を作ったという故事にちなみ火箸製作で起死回生を図る。

何度も危機に見舞われるが、伝統の技を途絶えさせないため、現当主52代明珍宗理が試行錯誤を重ね、昭和40年頃に「明珍火箸風鈴」が誕生したのである。

明珍火箸風鈴の音響の素晴らしさは国内ばかりか「東洋の神韻」として世界で評価が高まっているが、明珍家は多岐に亘ることなく常に品質と技術の向上を図るため、たゆまぬ努力を続けている。日本古来の玉鋼を使用した玉鋼火箸、新素材チタンの手打ち鍛造で仏具のお鈴を作るなど、絶えず挑戦を続ける姿勢、明珍家に受け継がれている。

サムライの身を守るための甲冑を作る鍛造技術が、今では人の心を癒やす音色を豊かせている。「鐵の一族」明珍家の誇りである。

● 明珍家 明珍宗理 製作

明珍火箸



平成の大修理の金具一部製作
(明珍 宗理・宗裕・敬三)

兵庫県の伝統工芸に指定されている「明珍火箸」。

鉄の火箸の音が触れ合うと、滲んだ音色が深い余韻を残してどこまでも響き渡り、包み込まれるような錯覚を覚える神秘的な音色。楽器としても高く評価されている。この明珍火箸の音色の秘密は、専門家の研究でも解明できておらず、機械では作れない。明珍家一族の体で覚えた、微妙な焼き加減・打ち加減を要する秘伝の技から生まれる。

明珍家の歴史は、平安時代末期から続く甲冑師で代々鎧・兜を製作してきた家系である。「明珍」という名は、約800年前近衛天皇に武具を献上したところ、「音響朗々、光り明白にして世の如く、類希なる珍器なり」として授けられたのが由来である。現在の当主は、52代目明珍宗理が務め、息子の長男と三男は後を継ぎ、次男は刀鍛冶である。

明治以降は武家社会も終わり甲冑が不要となるが、その鍛造技術を生かして生活道具の必需品の火箸作りを専業にしてきた。第2次世界大戦中は日本に鉄が無くなり、1960年代は石油・ガスの台頭で、炭が使われなくなり火箸の需要は減少する。明珍家は廃業寸前にまで追い込まれるが、1967年火箸の音に着目した宗理が火箸風鈴を考案する。

近年には「鉄花器」、チタンの手打ち鍛造で日本の仏教の道具「お鈴」を作る。中でも、刀剣の素材の玉鋼を用いた「玉鋼火箸」の音色は、稀なる響き究極の揺らぎである。

- ◎シシセサイザー奏者富田勲氏が明珍火箸を演奏に用いた事がきっかけで、世界中にその音色が知れ渡るようになり、スティービー・ワンダーは「近くで響いているのに遠くで響いているように聞こえる東洋の神秘的な音色」と称した。
- ◎明珍火箸の音はオーディオメーカー「ソニー」のマイクの音質検査に使用されている。世界企業のソニーの最先端技術の一端を明珍の伝統技術が担っている。
- ◎セイコーウォッチ・マイクロアーティスト工房と共同開発、セイコー創業130年記念「クレドール ノードスプリングドライブミニッツリピーター」(音で時と分を表現する複雑機構腕時計)の音源ゴングを鍛造し、明珍風鈴で特刻を知らせることに成功。

現代の名工 明珍宗理氏



略歴

(みょうちん・むねみち)
93年から甲冑師・明珍家の52代目
当主。兵庫県技能功労賞、日本文化
デザイン大賞など数多くの賞を受
賞。姫路市観光大使も務める。42
年(昭和17)姫路市生まれ。

チタンを風鈴に使って
みると、鉄とは違う独特
の音色を出すこともわか
った。しかし、表面が硬
いというチタンの特性が
逆に壁となり、一時は商
品化を断念。表面研磨が
難しく、光沢をうまく出

せなかったからだ。
試行錯誤を重ねていた
ころ、知り合いの新日鉄
OBに相談。紹介しても
らった新日鉄の技術者の
アドバイスで、サンドブ
ラストを使った研磨にい
きついた。

独特の音色を奏でる
「明珍火箸風鈴」の製作
で知られる伝統工芸作家
の明珍宗理氏。写真Ⅱが
「現代の名工」に選ばれ
た。明珍家は鎧兜の製作
を生業としてきた平安時
代から続く甲冑師。第52
代の宗理氏は、鉄を鍛錬
する先祖伝来の「匠の技」
を駆使し、火箸のほか花
器、創作楽器などの作品
を世に送り出している。
最近では新日本製鉄の協力
を得てチタンを使った工
芸品・実用品の製作にも
取り組む。

明珍家の鉄を「打つ」
技は、木綿針の細さまで
作を開始した明治時代。
「明珍火箸」の名がその
代名詞となった。しかし、
戦後、家庭から火鉢が消
えていくにつれ、火箸の

火箸風鈴は姫路の伝統
工芸品として、愛好家た
けでなく音響の専門家か
らも高い評価を受ける。
52代宗理氏は現在、チ

製作したのが最初。その
後、食器や花器といった
実用品にもチタンを採
用。最近では軽くて硬い
ステッキもつくってい
る。

チタンを含めた新日鉄の
素材提供によって市場に
送りだされている。
正月と盆を除く1年3
60日、毎朝6時半に火
をおこす。熱い鉄を金槌
で打つ作業は過酷な重労働
だが、鉄やチタンの持
つ素材の奥深さが次々と
課題を与えてくれるので
飽きることはないとい
う。「挑戦意欲を失わな
いことが、ものづくりの
極意」と明確だ。

「巧みの技」で鉄を鍛錬 新日鉄が協力チタンにも挑戦

鉄を鍛錬できるほどで、
機械ではほとんどまねの
できない技術。
明珍の名が広く知れわ
なるようになったのは、
鎧兜に代わり、火箸の製

注文が漸減。昭和40年代
には存続の危機に見舞わ
れた。
苦境を救ったのは4本
の火箸でつくった風鈴。
癒しの音色を出す「明珍

タンを使った工芸品・実
用品の製作にも力を入れ
る。軽い、錆びない、熱
くならないといった特
性に着目し、10年ほど前
にてんぷら用の料理箸を

チタンを使った商品は
現在、明珍氏が鍛造した
あと、八幡製鉄所で研磨
し、光製鉄所で酸洗いす
る仕組みを採る。チタン
製の実用品・工芸品は、



2010年
日本APEC
横浜

各国首脳控室
「日本が誇る伝統工芸」
特別展示





日本刀のコンクールで2年ぶりに最高賞を受賞した明珍宗裕さんー姫路市夢前町新庄(撮影・山崎 竜)

全国の刀工が作品の腕を競う「第7回新作日本刀 研磨 外装 刀職技術展覧会」(日本刀文化振興協会主催)の作刀部門で、姫路市夢前町新庄の明珍宗裕(本名・裕介)さん(41)が、2年ぶり3度目の最高賞「経済産業大臣賞」に輝いた。明珍さんは「イメージ通りに作品を仕上げることができた。評価してもらえてうれしい」と喜びを語った。

同展覧会は、日本刀に関する技術水準の向上と人材育成などを目的に、全国規模で開催されるコンクールの一つ。明珍さんは初回の2010年以降、毎年入賞者に名を連ね、12、14年にも最高賞を受賞している。

刀職技術展覧会の作刀部門

明珍さん経産大臣賞

2年ぶり 3度目受賞喜ぶ

的に、全国規模で開催されるコンクールの一つ。明珍さんは初回の2010年以降、毎年入賞者に名を連ね、12、14年にも最高賞を受賞している。

姫路の伝統工芸品「明珍火簀」の制作者で、平安時代から甲冑師として代々続く明珍家52代目宗理さんの次男。大学卒業後、1998年に広島県の刀匠久保善博氏に弟子入りし、7年間の修業後、同町に鍛刀場を開いた。

受賞作は長さ77センチ、反り2・6センチの太刀。島根県で生産された鋼を鍛え、特に刀身に浮かぶ文様「刃文」にこだわった。刀身に塗る粘土や炭粉などの配合や混ぜ方を工夫し、「空に浮かぶ雲」をイメージしたという。

明珍さんは「伝統的な技を自分なりに磨き上げ、次代につないでいきたい」と話した。

(三島大一郎)

城修理 伝統技術で貢献

明珍本舗と 市が感謝状贈る

世界遺産・国宝姫路城の「平成の大修理」に伝統工芸の技で貢献した明珍本舗(姫路市伊伝屋)と圓山記念日本工芸美術館(同市西今宿1)に20日、姫路市の石見利勝市長から感謝状が贈られた。

明珍本舗は、平安時代の甲冑師の流れをくみ、伝統工芸品「明珍火簀」の制作で知られる。第52代当主の明珍宗理さん、次男宗裕さん(37)が協力し、敬三さん(45)が携わった。明珍さんらが制作した金具や、木製の飾り物など約100点を漆を塗って寄付した。

江戸時代の金具の再現に試行錯誤したが、敬三さんは「一生に一度あるかないかの大仕事。お役に立ててうれしい」と喜んでいました。

圓山記念日本工芸美術館(井尻益郎館長)は、研究員で京時絵師の満元千鶴子さん(58)と学芸員森吉真美さん(45)が携わった。明珍さんらが制作した金具を加熱して漆を焼き付ける作業では、温度や湿度に細心の注意を払い、微妙な色の調整に力を注いだという。満元さんは「いい緊張感をもった」と話していた。

(小林伸哉)



感謝状を受け取った(左から)明珍敬三さん、井尻益郎さんー圓山記念日本工芸美術館



文 化

暑い夏に涼を求めて、風鈴。姫路の名産になった明珍の火箸（ひばし）風鈴は、ちょっと武骨な外形だが、独特の味わい深い音と余韻を残す。甲冑（かっちゅう）師として八百年以上鉄を鍛え続けた先祖伝来の技術が培った伝統の響きがそこにある。

甲冑から火箸へと形を変えて生き残った明珍の技術も、第二次世界大戦で大きな打撃を受けた。材料の鉄も、道具類も、軍部にみんな供出させられてしまったのだ。戦中戦後、父は、先祖伝来の家も土地も売り払って食いつないだ。地元の名士の後援もあって、何とか一九五三年に仕事を再開したが、今度は燃料革命だ。高度成長期に石油ストップやガスコンロの登場で、火箸の出番も減り、明珍もまさに風前の灯（ひもしび）だった。

W杯セレモニーにも、明珍火箸は音楽家の冨田勲氏が演奏に使ってくれるまでになった。サッカーのワールドカップ決勝戦の開幕セレモニーにも登場したと聞いて驚いた。私はどんだの時に味わったハンゲリーな気持ちを持って、四十二年間鉄に立ち向かい続けた。同じ仕事場にいる息子たちに技の伝承を

火箸風鈴、平安から涼

◇先祖伝来の甲冑師の技、現代に生かす◇

明 珍 宗 理

「暗夜行路」にも名が明珍家の由来は、一五〇年ごろに近衛天皇に献上した武具を「音響明々光の明白にして玉の如く類稀なる珍器なり」と称賛されて、明珍の姓を賜ったと伝えられる。平安時代からの伝統を継ぐ甲冑師として、江戸時代は姫路の酒井家に仕えた。明治維新で縁（ゆかり）を離れた時に、四十八代目の宗之が甲冑師の余技として製作していた火箸に目を付け、家業を承らせた。大正期に志賀直哉の「暗夜行路」にその名が出てくるほど全国に知れ渡った。私はその明珍家の五十二代目にあ

った。そうすると、軽い振り子が、微風にも揺れて火箸とぶつかる。四方を火箸が囲んでいるので、東西南北、どこから風が吹いても鳴り響く。しかし、涼やかな音を響かす風鈴は気温五〇度を超す仕事場から生まれる。左手に握ったやうとこで真ッ赤に燃える鉄をおさえ、右手の錘でたたいて、一本の火箸を鍛える

のに、何百回もそれを繰り返す。汗をかいた体には、塩が浮き出る。苦勞の末に六五年にできた火箸風鈴は、店に並んだとたんにお客さんがつきまわって知れ渡った。数百年続いた明珍の鍛錬の技が生み出した音によって救われた。

当時使っていた鉄は、鉄鉱石とコークスを原料に製鉄所で作られた鋼鉄だった。私は、何とか昔ながらの玉鋼（たまはがね）で作りたいと思っただけで、日本美術刀剣保存協会（日刀保）が島根県横田町に復元した製造所「日刀保」にたただけだ。砂鉄十、木炭十三、使

火箸風鈴(左)を打つ筆者



試行錯誤の末に完成。しかし、火箸を何本か殺（ころ）す下（くだ）けても、火箸は重く、ちょっとした風ではびんごもしない。試行錯誤の末に、火箸を四本に増やし、その真ん中に振り子をつくる工夫を

して、男十二人が三層夜かけてできるのがわずか三、四程度。至難の業で日本刀の伝承を図るためのものであると断られた。一時は骨とう屋巡りをしていたが、玉鋼を使った昔の鉄製品を集めて鍛えて使おうかと思っただけで、どうしてもあきらめられない。何度も足を運んで、十二年間鉄に立ち向かい続けた。同じ仕事場にいる息子たちに技の伝承を

や各関係者の理解が得られ、九五年にやっと分与してもらえるようになった。火箸は、玉鋼を使うと、波がうねるような澄んだ響きを立てた。

委ねる日が来るだろう。私の代でかなわないかもしれないが、鉄製品のコレクションを展示する「明珍ミュージアム」を建てるのが夢だ。（みょうちん・むねみち 鍛冶師）

工芸の真価 再発見

東京芸大の前身、東京美術学校開校から百年余の中で、「工芸」をテーマにその歩みを俯瞰（ふかん）するのはいまが初めてだ。明治期に生まれた「工芸」という概念の成り立ちのあいまいさとそれは無関係ではない。近年の研究によると、明治以前には工芸という言葉はなかったという。それが明治二十年代に入ると内閣勸業博覧会の出品区分や、帝国博物館の列品区分などの制度改革に伴って美術的価値を備えた美術工芸という名称が生まれた。

大英博物館、メトロポリタン美術館、ボストン美術館には海老、蟹、シャチなどが多数展示してあります。



「自在龍置物」江戸時代（1713年）明珍宗察作（東京国立博物館所蔵）鉄製。鱗、指、鬚、足など関節が全部動きます。

文 化

秘めた迫力

今回の展示で真っ先に気がつくのは、工芸が工芸という名を持たなかつた江戸時代と、その香気を残している明治前期の作品の秘める迫力である。例えば幕末期の甲冑（かっちゅう）師、明珍宗察（みょうちんむねあ

き）の「自在龍置物」。鉄の円筒状のものを鱗（うろこ）ごとにつくって、円筒の部品をすらしながら重ねて鉄（びょう）で留める。この龍の胴体が自在にくねくねと動いたり、口を開閉したりするようになっている。これが甲冑（かっちゅう）の余技というから驚きである。この自在置物の最高傑作を見た岡倉天心は、東京美術学校に鍛冶科の設置を決定したという。（編集委員 竹田博志）